

---

## 火災は異常な速さで燃え広がった

(Jレスキュー・編 ドキュメント東日本大震災、イカロス出版、東京、2011、p.143-156)

2012年6月8日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

3月11日。東京消防庁から下山正敏部隊長が率いる消防救助機動部隊（ハイパーレスキュー）が出動した。

3月11日の午前、下山隊長らは東京都大田区京浜町の庁舎で訓練を行っていた。大きなゆさぶりが起きたのは晴天の下、早春の午後だった。テレビをつけて確認すると、東京は震度5強、震源地は三陸沖であった。

もし、震源地と震度で「東海地震」と判断できれば、日本屈指の東京都消防庁ハイパーレスキューは定められたアクションプランに沿って迅速な行動ができたであろうが、アクションプランのない地震災害ではハイパーレスキューはあくまで消防援助隊として出動するしかない。

ハイパーレスキューについて説明する。1995年（平成7年）1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、消防の特別救助隊（レスキュー隊）だけでは対応できない状況となった。この教訓を踏まえて1996年（平成8年）12月17日、東京消防庁では、災害時に機動力を発揮する特別な技術と能力を持った部隊「消防救助機動部隊（通称：ハイパーレスキュー）」を発足した。

つまり、ハイパーレスキューは大災害対応のエキスパートであった。

そのような彼らが三陸沖を震源とする大規模な地震からすぐさま連想した出来事が、今から17年前の悲劇、阪神淡路大震災であった。

地震発生直後から東北の太平洋沿岸各地には大津波警報が発令されていた。しかし、1時間も経たないうちに10メートルを超える津波が田畑や家、車を次々と飲み込んでいった。

さらに津波は火災を起こした。本来ならば水と火という互いを打ち消しあう存在が事態として引き起こされたのだ。気仙沼市北部、鹿折地区を中心とした火災は気仙沼市全域を火の海に変えた。

下山はその惨状を見てもなお、火災対応と人命救助の任務を全うした。その際、阪神淡路大震災での教訓である、建築物の崩壊による人命救助の難航から、あらかじめ重機を手配しておいた。しかし、被災のため現地での重機の調達が十分に行えず、阪神淡路大震災以降、下山らが誇りにしていた「要救助者を決して見放さない。後ろには誰もいない。オレたちが救助をあきらめたら、その人の生存はない」という信念は、燃え上がる大地と、あちこちに打ち捨てられた亡骸によって打ち砕かれた。

阪神淡路大震災の際に消火栓が使えなくなり、火災に為す術なく拡大を許した消防はその後、活動方針として「消防は救急・救助業務を凍結してでも全勢力を挙げて消火活動にあたる」を打ち立てた。しかし、下山らの懸命な消火活動にもかかわらず、気仙沼の火災は衰えることなく燃え続け、スーパーポンパーと500人のレスキュー隊が総がかりで、ようやく火勢が衰えたのは翌日の午後であった。